

## バスクの“キセキ”

— バスク語について —

杉 山 朱 実

## はじめに

恩師、アンドレ・マルティネは、ソシュールの共時言語学の考え方を遂行し、「祖語への追及研究ではなく、言語構造そのものへの視点から、言語機能への解明をすべし」との研究方法を示し、従来の単語“mot”（フランス語）という概念から、更に深めた、“monème lexical”（語彙素）と、“monème grammatical”（文法素）という新たな分析概念を確立した。

この「語彙素」と「文法素」という概念が、一つの単語の中にアマルガム状態で置かれている屈折言語の多いヨーロッパにあって、南ヨーロッパのピレネー山脈にまたがるスペインとフランス国境に広がる一帯に、現在は、ロマンス諸語（スペイン語、フランス語、カタラン語等）に囲まれながらも、印欧語族ではなく、いまだに起源は謎でありながら、現存する膠着言語の特徴を示すバスク語構造も、分析・解析することができる。このマルティネの確立した言語機能論の視点から、バスク語に潜在する能格構造への視点を、この論文では検証してみたい。

## 第一章 バスク語動詞について

バスク語動詞には、統語的屈折（une flexion synthétique）をした単純形動詞と分析的屈折（une flexion analytique）をした複合形動詞がある。バスク語動詞の法（mode）は、「現実法（Réel）か「可能法（Potentiel）」である。基本となる時制（temps）は、「現在（le Présent）」と「非現在（le non-présent）」である。非現在には「過去（le passé）」と「仮定（l'éventuel）」を含む。これらの法・時制の組み合わせにより、六種の表現が説明できる。

## 動詞の法・時制

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1) 現実法・現在 (Pr R) | 4) 可能法・現在 (Pr P) |
| 2) 現実法・過去 (Pa R) | 5) 可能法・過去 (Pa P) |
| 3) 現実法・仮定 (Ev R) | 6) 可能法・仮定 (Ev P) |

以下に、具体例を示してみる。

## 第一節 単純形動詞

まず、バスク語動詞の基本体系として、動詞“egon” (rester) をフランス語と比較してみる。

バスク語	1) Pr R : dago	4) Pr P : dagoke
フランス語	il reste	il peut rester
バスク語	2) Pa R : zagon	5) Pa P : zagoken
フランス語	il restait	il pouvait rester
バスク語	3) Ev R : lago	6) Ev P : lagoke
フランス語	(S') il restait	il restreint

動詞“egon”の語根は、“-go-”である。人称表示は、接頭辞で示されるが、三人称のみは、時制によって変わる。

“d-”は、三人称・現在，“z-”は、三人称・過去，“l-”は、三人称・仮定を示す。

“dago”, “zagon”, “lago”等の、“-a”は、子音衝突を避けるための挿入母音である。

“zago-n”, “zago-ke-n”, の“-n”は、過去の表示である。

“dago-ke”, “zago-ke-n”, “lago-ke”の“-ke”は、可能法の表示である。

## 第二節 単純形自動詞の人称表示

単純形自動詞には、「一項人称変化（参加者は動作主）」と、「二項人称変化（参加者は動作主と受益者）」の二種類がある。

EX)	“joan” (aller)	: 語根 “-oa-”
	n-oa	: je vais
	h-oa	: tu vas
	d-oa	: il (elle) va
	g-oa-z	: nous allons “-z” は複数の表示
#1)	z-oa-z	: vous (sg) allez
#2)	z-oa-z-te	: vous (pl) allez
	d-oa-z	: ils (ells) vont

#1) “zoaz”は、以前は、“vous (pl) allez”の二人称・複数の意味のみを持っていたが、フランス語の影響により、二人称・単数形の丁寧系へと意味変化させた。それ故、新たに、二人称・複数形を説明するために、#2) “zoazte”の形を造りださねばならなかった。

単純形自動詞の二項人称変化では、動作主の人称表示は、常に冒頭に置かれ、受益者は以下のような人称表示が、語根に後続される。

受益者：一人称単数	: -t
二人称単数（男性）	: -k
二人称単数（女性）	: -n
三人称単数	: (ゼロ:表示なし)
一人称複数	: -gu
二人称複数	: -zue
三人称複数	: -te

以上から、動詞要素の順は、次の様になる。

「動作主の人称表示」 「語根」 「受益者の人称表示」

### 第三節 単純形他動詞の人称表

単純形他動詞の人称表示には、二項人称変化（参加者は、動作者と被動作者（物））と三項人称変化（参加者は、動作者、非動作者（物）、受益者）がある。一例として、動詞“ikusi” (voir) の動詞活用の一部を以下に示してみる。

現実法・現在 (Pr P) (被動作者 (物) は三人称単数の場合)

#### 動作者

一人称単数	d-a-kus-a-t	: je le vois
二人称単数（男性）	d-a-kus-a-k	: tu (m) le vois
二人称単数（女性）	d-a-kus-a-n	: tu (f) le vois
三人称単数	d-a-kus-a	: il (elle) le voit
一人称複数	d-a-kus-a-gu	: nous le voyons
二人称複数	d-a-kus-a-zue	: vous (pl) le voyez
三人称複数	d-a-kus-a-te	: ils (ells) le voient

“-kus-”は、動詞“ikusi”の語根である。

“d-”は、三人称・単数の被動作者（物）を示し、先頭に置かれる。

“-a-”は、子音衝突を避けるための挿入母音である。

二人称・単数の動作者は、男性形が“-k”,女性形が“-n”と分かれている。

三人称・単数の動作者の表示はゼロである。他動詞の動作者は、接尾辞によって示される。

他動詞の二項人称表示 (PrR; 現実法・現在) は以下の様になる。

「被動作者（物）の人称表示」「語根」「動作者の人称表示」

更に、他動詞の三項人称表示（PrR: 現実法・現在）は、以下の様になる。

「被動作者（物）の人称表示」「語根」「受益者の人称表示」「動作者（物）の人称表示」

以上の検証から、バスク語における「単純形自動詞の二項・受益者」表示と、「単純形他動詞の二項・動作者」の表示が、同じであることがわかる。

これは、次章で扱う、「バスク語の能格表現」への、大事な機能分析といえる。

## 第二章 バスク語の格について

バスク語動詞の基本システムを簡略に説明したが、バスク語・複合系動詞への考え方にも様々な見方が、あると思われる。その基本となるのが、ピエール・ラフィット（Pierre LAFITTE）の“*Grammaire Basque*”（1978）と、ジャック・アリエール（Jacques ALLIERES）の“*Manuel pratique de basque*”（1979）である。

両者の格についての見解を以下に示してみると、主に10格で、区分もほぼ一致するものと思われる。以下に示してみる。

1. Nominatif（主格）：接尾辞“ゼロ”，自動詞の主語・他動詞の直目を表す。（両者）
2. Ergatif（能格）：接尾辞“-k”，他動詞の動作者を表す。（アリエール）  
Actif（動格）：接尾辞“-k”，他動詞の主語，或いは，受動動詞の動作主補語を表す。  
（ラフィット）
3. Instrumental（具格）：接尾辞“-z”，広い意味での「手段」の補語を表す。（アリエール）  
Mediatif（媒介格）：接尾辞“-z”，手段・原因・仕方を表す。（ラフィット）
4. Datif（与格）：接尾辞“-i”，付与・帰属の補語を表す。（両者）
5. Génitif possessif（所有の属格）：接尾辞“-en”，所有の限定補語を表す。（ラフィット）  
：帰属の抽象関係を説明する名詞の補語を表す。（アリエール）
6. Comitatif（従格）：接尾辞“-ekin”，同伴の補語を表す。（アリエール）  
Unitif（随伴格）：接尾辞“-ekin”，フランス語の前置詞“avec”を示す。（ラフィット）
7. Génitif locatif（位置の属格）：接尾辞“-ko”，場所の限定補語を表す。（ラフィット）  
：空間や時間における位置の具体関係を説明する名詞の補語を表す。（アリエール）
8. Inessif（内格）：接尾辞“-n”，位置（ラテン語のUBI）を表す。（ラフィット）  
接尾辞“-n”，人がいる場所（ラテン語UBI）を表す。（アリエール）
9. Elatif（出格）：接尾辞“-tik”，起源（ラテン語UNDE）を表す。（ラフィット）  
：人が何処から来るのかの場所（ラテン語UNDE）を表す。（アリエール）
10. Partitif（分格）：接尾辞“-ik”部分冠詞に代わるものを表す。（ラフィット・アリエール）

## 第一節 能格について

能格への考え方は、様々な言語学者達が、その独自の考え方を述べている。

そのいくつかを以下に紹介してみる。

(泉井久之助：『ヨーロッパの言語』1968, 『言語研究とフンボルト』1976)

泉井氏のバスク語動詞への詳細な考察のきっかけは、その前文で述べられている。第二次大戦の前に、ミクロネシアの言語調査のため、サイパン島に滞在した時であった。そこに、スペイン領であった時から引き続き滞在していたカトリックの尼僧院でバスク語との出会いがあったと書かれている。

彼の考察から、最も単純な例に置き換えて、能格を示してみる。

例えば、バスク語で「家（単数）を持つ」＝「家（単数）がある」を示してみる。

(フランス語を比較として対照させてみる。)

E X 1) ETXE - A    DU  
           Maison- la    il(elle)l'a

家が“etxe”である。そのあとにつく“-a”は、定冠詞の単数の形である。動詞“du”は、三つの部分に分けられ、はじめの“d-”は、三人称・単数の目的語を表し、ここでは「家（単数）」を再現している。続く、“-u”は、動詞“ukan” (avoir=have)「持つ」の語根である。そして、最後のゼロ指標が、三人称・単数の主語「彼（彼女）」を表す。

この文章を、主語「私は家（単数）を持つ」＝「私は家（単数）がある」に変換してみる。

E X 2) ETXE—A    DU—T  
           Maison- la    je l'ai

ここでは、動詞“d-u-t”となり、最後の“-t”が、一人称・単数の主語「私」を示す。

ここで、能格を加えた文章との対比を見てみる。

E X 3) NI—K            ETXE—A            DU—T  
           Moi(erg)        maison-la            je l'ai

ここでは、「私」を強調して、別に独立した「私」が、必ず、能格“ni-k”の形で先頭に置かれる。「私（に）は、家がある」と、「私」を強調した文、E X 3）と、単に「所有の行為・現象」を表す、E X 2）とは、明らかな違いが判る。動詞“dut”だけでは、単なる、付帯的条件として明示されるにすぎないのである。

フンボルトがバスク語構文を「主語と動詞と目的語」のタイプの文として解釈していた時代には、バスク人自身も、隣接言語の影響から、尋ねられた折には、「能格を主格」とみなし、説明していたように思われる。

次の視点では、「能格現象を持つ言語では、動詞が能動態・受動態のいずれでもなく、または、いずれでもあることが多い」と述べている。その一例を以下で見てみよう。

EX 4) GOIKO            ETXE—A            DU—T  
          Haut            maison-la            je l'ai

EX 2) の例文に，“goiko”（高い）を加えてみる。「あの（屋根が）高い家（単数）を私が持つ」或いは「あの高い家は、私が持っている」と解釈される。前例と同様に、「私」を強調させた能格構文を見てみよう。

EX 5) NI—K            DU—T            GOIKO            ETXE—A  
          Moi(erg)            je l'ai            haut            maison-la

ここでは「私によって、その高い家はもたれている」と解釈されなくては、ならなくなる。

では、動詞“DU T”は、能動形か、受動形か。そのどちらにもとることができる。従って、引用したバスク語による動詞“DU T”について言えば、「所有の行為、または現象」が「進行中または存在する」こと自体が表現の意味的中核であり、動詞内の“d -”それ=家や“- t”私は、それをめぐっての付帯的条件の明示である。

## 第二節 アンドレ・マルティネの能格構造への視点

マルティネの能格・バスク語への視点は、『言語機能論』『一般言語学要領』『言語の構造』『共時言語学』の随所にみられるが、その要点を以下に、示してみる。

自動詞の主語と他動詞の目的語を絶対格として、たすき掛けで結ぶ検索は、例えば、柴谷方良氏の『言語の構造』1982年等に見られるが、マルティネは並行するものとして、以下のような説明がなされている。

### 能格言語の格表示

1.		主語	自動詞	関節目的補語
2.	主語	直接目的補語	他動詞	間接目的補語
	↑	↑		↑
	能格	主格	動詞	与格

以上の様に考えると、先に説明したバスク語動詞のシステムにおいて、間接目的語があるか、ないかにより、バスク語では、自動詞が一項動詞、または、二項動詞となり、他動詞が二項動詞、または、三項動詞となることが、すっきりと判明する。

次に、第一の視点として「限定部」の「被限定部」への先行を挙げ、この構造が、句構造に留まらず、統辞構造にも並行して、対応関係にあることを示す。

以下にその簡素化した例を示す。

EX 1)	UNTZIA	AUDI KI	DU	: 他動詞 (対象を理解)
	主格			複合形動詞
	花瓶を			投げた

EX 2)	HAURRA	MINTZATU	DA	: 自動詞 (動作者を理解)
	主格			複合形動詞
	子供は			話した

バスク語動詞では、行為の参加者への方向性(能動態・受動態)を決める必要がなく、それ故、「参加者が言表の中に姿を現すことが、有用である限りにおいて、陳述部の補語の資格で姿を現す」のである。その例として、前述のEX 1)とEX 2)に参加者を付与してみる。

EX 1 #)	AITA-K	UNTZIA	AUDI KI	DU	: 他動詞
	能格	主格			複合形動詞
	父が	花瓶を			投げた

EX 2 #)	HAURRA	MINTZATU	DA	GIZONAR-I	: 自動詞
	主格	複合形動詞			与格
	子供は	話した			男に

つまり、「もっとも直接的な関係に対応する補足部」が「経済的に屈折的な接尾辞なし」の前置された限定要素の形をとるのである。逆に言えば「能格構成を持つ言語を特徴づける事実」は、「ある特別の接辞によって示されることではなく、この接辞が用いられるのが、ある場合に限られる」のである。結論として、マルティネのバスク語への回答は、「能動態・受動態に、お構いなく、最も経済的な形で、自らの表現を見出し、参加者相互の対比性が確定され、紛れることのない言語」なのである。

つまり、“主語—目的語”の二極構造ではない、能格性という新たな視点からの検証が、既存の言語にも当てはめられ、再考察の可能性があるのである。北アメリカの土着言語、コーカサス諸語、太平洋のミクロネシア連邦の土着言語等、能格言語の構造を持つ言語体系は、まだ深い研鑽がなされていないが、この地球上には、まだ知られていない言語も含めて多く存在するものと思われる。

### 第三節 概念と方向性

バスク語 “hil” は、「死という概念」を表し、それ単独では、自動詞でも他動詞でもない。

“hil-tze-n” になると、「死という行為」を表し、単独でも、自動詞・他動詞としての価値を持ち動詞を造る、その一例を以下に示してみる。

EX 1)	HIL	DA : 自動詞 (il est)	→ 彼は死んだ
EX 2)	HIL	DU : 他動詞 (il l'a)	→ 彼は(誰かを)殺した

もう少し複雑な例文を、聖書“ルカ伝”から引用してみる。

EX 3)	NI Moi	HEMEN ici	GOSE-AK faim — (能格指標)	HIL-TZE-N mort/tue (内格指標)
→ ここで、私は、飢死しそうだ				

ここで、“hil-tze-n” が、EX 1) や EX 2) と同じ、「死」という概念から、“-n” 内格が膠着して「死ぬという行為」を説明している。

EX 1 #) HILTZEN DA → 自動詞：彼は死ぬ

EX 2 #) HILTZEN DU → 他動詞：彼は(何か・誰かを)殺す

それ故、助動詞のない、“HILTZEN” において、大切なのは、「死」の概念である。

文脈では、まず“GOSE-AK” (飢え) が、“HILTZEN” (死) より前に置かれ、能格となっている。また文頭には、“NI” (私) が置かれ、ている。それ故、“HILTZEN” (死) に至らしめるのが、“GOSE-AK” (飢え) であり、この「飢え」を体現する誰かが、“NI” (私) に置かれ、文頭にある。

これらの例からも分かる通り、「焦点」は、文頭に置かれる。バスク語動詞の単純形動詞では、この潜在的「左方転移」の現象が見られ、複合形動詞では、文脈での表層における「焦点」の左方転移の現象がみられる。以下で最も、単純な一例を見てみよう。

EX 4)	D—A—KAR—T	→ “DAKART” バスク語では一語として解釈する。
	le enporte je	(A は子音間での衝突回避の挿入母音)
	↑            ↑	
	主格        能格	← 動作者と目的者が同時に一つの動詞内に「動詞の単純形」として含まれる。
	→ je l'emporte: (私は彼を運ぶ → 私は彼を連れていく)	



EX 4 #) LIBURU—A D—A—KAR—T  
 Livre le le apporte je  
 ↑ ↑  
 主格 能格

→ j'apporte le livre (私はその本を持ってくる)

バスク語動詞においては、他動詞であれ、自動詞であれ、「接頭辞の要素」は常に主格である。この主格は、動詞の最も重要な参加項を直接、定義する。伝達機能を確認可能なものとする為に最も経済的な形である主格が、まさに「潜在的左方転移」に置かれる。それ故、動詞における最も重要な参加項は、「主格」の「焦点」である時、述部部分の先頭にある。

従って、バスク語構文では、能格のみが、際立たせの参加項のように扱われてきたが、決して、そうではなく、必要な、トピックとしての参加項の時、あえて、能格として、先頭に置かれるのである。(第二章・第一節のEX 2)の例の様に)

## 終わりに

フランスでの大学院での言語研究にあたり、機能言語学の視点から「ヨーロッパにあり、ヨーロッパ言語でありながら、印欧語族に属さず、起源不明の「悪魔の言語」と呼ばれるバスク語研究」にあたって、「膠着言語を話す日本人の視点から見れば、類型論・形態統語論の観点から、新たな側面が研究できるに違いない」と期待され、高名なアンドレ・マルティネ先生や、ジャック・アリエール先生の両恩師のもとで、研究論文を研鑽していくことができたのは、本当に、幸せの軌跡＝奇跡であった。1999年7月16日、マルティネ先生は天上の人となり、アリエール先生も2000年8月、同じく天上の人となった。両氏の様に、バスク語研究に没頭する言語学者は、消えてしまった。だが、彼らが残した理論から、「統一バスク」が生まれ、2020年の現在、その「新・バスク語」が自由に話すことができ、スペイン・フランスの両バスク地方は、ヨーロッパでの有名な保養地として復活し、観光・美食の街として、発展を続けている。バスク自治州では、「統一バスク語」のバスク語教育がなされ、ますますバスク語を話す「新・バスク人」達が増えている。

更には、バスク語で書かれた新聞はもちろん、小説、詩集、等の出版も自由に行われ、朗読会や、バスク語での演劇会も模様されている。第二次大戦下、フランコ将軍に禁止されていた、バスク語の言語・文化が、今まさに花を咲かせている。

絶滅した言語・文化が多くある中で、バスク語のキセキ、バスク人と名乗れる誇りを持続できる、平和な世界を願っている。

最後に、恩師マルティネ先生の『共時言語学』からの一文を添えて、末尾としたい。

「どの言語においても —————人間は、みな、同じ惑星の上に住んでいて、人間であるという共通点をもっているのだから。」天上から、人間としての大切な出会いを見守っているように思う。

## 参考文献

- ALLIERES Jacques: 1977. *Les Basque*. Collection que sais-je. PUF, Paris  
: 1979. *Manuel pratique de basque*. Editions Picard. Paris  
: 1979. *Statut et fonction des flexions verbales*. La linguistique, vol 15, Paris
- FILLMORE Charles: 1968. *The case for case*. Universals in Linguistic Theory. Emmon and Robert T, Harms. New York.
- LAFITTE Pierre: 1978. *Grammaire basque*. ELKAR. Bayonne.
- MARTINET André: 1962. *Le sujet comme fonction linguistique et l'analyse syntaxique du basque*. B.S.L 57. Klincksieck. Paris.  
: 1970. *Elements de Linguistique générale*. Armand Colin.Paris.  
: 1972. *Cas ou Fonction*. La linguistique, vol 8. Paris.  
: 1974. *La linguistique synchronique*. PUF. Paris.  
: 1985. *Syntaxe Générale*. Armand Colin. Paris.  
: 1989. *Reflexions sur la signification*. La linguistique,vol 25. Paris.  
: 1989. *Linguistique Générale, Linguistique Structurale, Linguistique Fonctionnelle*. La linguistique, vol 25. Paris
- 泉井久之助 : 1968. 『ヨーロッパの言語』, 岩波書店  
: 1976. 『言語研究とフンボルト』, 光文堂
- 柴田方良 : 1978. 『日本語の分析』, 大修館書籍  
: 1982. 『言語の構造』, くろしお出版
- アラン・セール (翻訳) 松島京子  
: 2012. 『ゲルニカ ―ピカソ, 祖国への愛―』, 富士房インターナショナル
- 狩野道子 : 1992. 『バスク物語り ―地図にない国の人びと―』, 彩流社